

散歩が楽しくなる雑草の本

今回のテーマは植物です。中でも身近な存在でありながら普段あまり気にとめることのない雑草の本をご紹介します。

1冊目は、かわしまよう子・著『草手帖』です。むしってもむしっても生えてくる嫌われ者のようなイメージの雑草ですが、どんなところでも力強く根を伸ばし、咲きたいように咲く一途な姿に憧れさえ抱いているという著者による雑草案内です。例えば、オオイヌノフグリは、犬の陰囊に似ていることからその名がついたちょっぴり残念な名前ですが、その花はとても繊細です。小さな宝物を扱うように、どんなにやさしく指先に包んだとしても、摘んだとたんに花びらをポトリと落とします。とても短命な一日花(いちにちばな)で、背丈が低いので、ほかの草たちに影を作られまいと誰よりも早く目を覚ましている努力家な花なのです。どこにでもある雑草の知恵と力を知れば、道々に生えている雑草が違って見えるかもしれません。

2冊目は、前田まゆみ・作『野の花えほん 春と夏の花』です。スマレ、レンゲ、ナズナなど春から夏に咲く野の花をイラストで紹介しています。例えば、私たちが目にするタンポポの多くはセイヨウタンポポと呼ばれるもので、もともと日本にあるタンポポよりもふえる力が強く、今では町中や住宅地などに多くみられるようになったそうです。セイヨウタンポポは、花の下にあるがくといわれる部分の葉が反り返っているため、日本にもとからあるタンポポと見分けることができます。また、子どものころにままごと遊びによく使ったカラスノエンドウは、ソラマメの仲間、たくさん集めて豆ごはんにしたり、サラダにちらして食べることができます。他にも、花や葉を使った遊びや、おいしい食べ方など、草花の様々な楽しみが詰まった絵本です。

3冊目は、有川浩・著『植物図鑑』です。“図鑑”というタイトルですが分類は物語、道に生えている雑草を摘んで食べる男女の草食系恋愛小説です。主人公のさやかは、ある晩道ばたに落ちていた行き倒れ寸前の男の子を拾います。その正体は、家事全般が得意で、植物のことを語りだすと止まらない植物オタク。二人は週末ごとに植物を狩ってはおいしくいただきます。ノビル、セイヨウカラシナ、イヌビユなど、一般的には雑草と呼ばれる植物を、簡単に料理するアイデアが満載のおいしくてちょっとほろ苦い物語です。

普段見過ごしがちな雑草のことを知ると、いつもの散歩がもっと楽しくなるかもしれません。本を片手に道草してみてもいいのですが。雑草にはよく似た形のものや見分けのつきにくいものがあります。食べるときは図鑑などでよく確認しましょう。